5分で分かる『蟹工船』！これって実話？【あらすじと解説】　一部追加修正

＜蟹工船での仕事＞

蟹工船での仕事は、海で蟹を取り、それをそのまま船の中で加工までしてしまうという内容。蟹を日本の港まで運び、工場で加工するのが一般的ですが、この方法では運搬中に蟹が腐ってしまいます。だったら船の中で加工までしてしまえばいいとして考えられたのが、蟹工船だったのです。

<乗組み員＞

この船の乗組み員は、そのほとんどがお金に困っている人たち。田舎に住んでいて働き場所がない、借金で首が回らない、そんな人間ばかりが集められます。彼らは蟹工船に乗るしか生きる道がないような人たちばかりです。

＜労働環境＞

しかし、この船の労働環境は劣悪なもの。毎日毎日16時間以上も働かせられ、休みの日はなく、風呂も入れません。そして、体調が悪くなっても働かせられます。しかし、誰も監督に歯向かうことはできません。なぜなら、歯向かうと拷問されるからです。この光景は、力あるものに搾取される資本主義の構図を表しています。

＜乗組み員のストライキ＞

上にいる人はぼろ儲けで、底辺にいる人たちは命を削ってまでも働かせられ……。働けども、働けども、儲かったお金が労働者に還元されることはないのです。そんなある時ついに、この労働に耐えられなくなった乗組み員がストライキを起こすことに。

労働者たちはストライキを起こしますが、海軍によって中心人物たちが捕まってしまいました。しかし彼らは諦めず、自分たちを守ってくれるはずの存在である軍の実態を知ってもなお立ち上がり、ストライキをもう1度起こすことに決めるのです。彼らは経営陣に、そしてこの国に勝つことができるのでしょうか。

＜資本家の考えの否定＞

利益さえでれば、労働者をまるでゴミのように扱ってもよいとしている資本家の考えを、真っ向から否定している本作。現代では、この考え方は多くの人に受け入れられる考え方でしょうが、当時の日本でこの流れ、そして結末を書くことは、相当な勇気がいることだったでしょう。

＜労働者の＞

そして、読者も多喜二の考え方に賛成はすれど、その感想を公にできない世の中だったと考えられます。この大胆な発信が現在までも残されているということは、それだけ日本の労働者は鬱憤が溜まっていたのでしょう。

＜作者の思想＞

作者の思想が詰め込まれている『蟹工船』が出版されたことによって、当時の日本には救われた労働者が、たくさん居たはずです。結果的に拷問によって虐殺されるという最期を迎えた多喜二ですが、彼の考え方は現代にも引き継がれ、確実にかつてのような圧力は少なくなっているのではないでしょうか。

働くとはなんなのかをあらためて考えさせられる本作。ぜひみなさんも、小説でも、漫画でも、映画でも、小林多喜二が命をかけて残した思想に触れてみてはいかがでしょうか。そして、あらためて働くことについて考えてみてはいかがでしょうか。心からおすすめできる作品です。

引用先　URL：<https://honcierge.jp/articles/shelf_story/6540>　HOME：<https://honcierge.jp/>　ホンシェルジュ